

小野 あずさ

No Body 1

先月、ロンドンのダンスシアターとして有名な、サドラーズウェルズ劇場で、照明に関わっている人は皆ワクワクするような、No Bodyというプロジェクト公演(作品)を観てきました。出演者なしの、照明、音響、劇場システムだけで演出するという、新しい試みの2作品のご紹介です。

1作品目は、この劇場のアソシエートアーティストの1人である、照明家マイケル・ハルズ氏のメインステージでの作品です。劇場に入るところからが作品で、人数制限された観客は、パーカンで意味ありげにランダムに照らされた無人の客席を通り過ぎ、セーフティーカーテンの閉まったステージへと誘導されます。ステージに入ると、海底を想像させる薄暗くて青い、だだっ広いスペースがあり、小惑星のような白熱灯電球の集団があちらこちらに浮かんでいて、その周りを自由に動き回れます。そこから静かに音楽が始まり、それぞれのスピードでほんのり、明るくなったり、消えたり、音楽と照明のダンスが始まります。音楽が徐々に盛り上がってくると、電球の小惑星は形を変えながら、暗闇の空へと姿を消して、夢のような幻想的なシーンは終わります。

そんな余韻に浸っていた直後、今度は空の彼方から何百もの光の点(パーカン ベリーナロー)が、ゆっくり近づいてくるのが見えます。観客はみんな、天井を見上げている状態で、寝っ転がっている人もいれば、立って見上げている人もいます。その壮大な光の点が近づいてくるのか、自分が近づいて行っているのかわからないような、重力の錯覚みたいなものを覚えました。その次の瞬間、ワープでもするかのように、何百もの光の点が、一気に光を増して、頭のすぐ上まですごい勢いで落ちてきたのです。「きゃー!!」っという悲鳴が一瞬聞こえましたが、この勢いのまま第2幕スタートという感じで、頭上に並ぶ数百のパーカンのライブショーが始まりました。滝のように荒々しく、でもリズミカルに流れるパーカンのチェースから、熱気が直接、体に伝わってくるのを感じました。パーカンならではのパンチと熱。観客をはじめ、照明に関わってきた自分自身も、ここまで照明を体で感じられるという体験は初めてだったので、圧倒されました。

第3幕目はプロジェクター1台のみから出る、照明の空間イラストレーション。これは白黒の線や幾何学的形が、空間を駆け巡る、空間を切り抜く感じで、レーザーショーにも似ているけど、けばけばしていなく、シンプルでスタイリッシュな演出でした。マイケル氏は、プロジェクターの明かりを照明として使うことがよくあるそうで、このプロジェクトでもビデオデザイナーのヤン・アーバノウスキーさんとコラボレーションしていらっしゃいました。

会場に入る前に配られたプログラムの中で、マイケル氏はこのように話しておられます。「このプロジェクトに参加した3つの理由。1つ目は、普段、暗闇の客席に座って、受け身な状態で観劇する観客に、実際にステージに上がってもらい、照明も含め、パフォーマンスすべての要素を間近で体験してほしいということ。彼らに照明のシャワーを浴びせ、照明を肌で感じ、ダンサーの気分を味わってもらい、公演の中心になってもらう。当たり前のことのようだけど、実際それを体験できる機会はほとんどない。2つ目は、エネルギーを可視にする、小さく輝く1本の細いワイヤーをもった、ささやかなタングステン電球への敬意を示すようなものを作りたかった。3つ目は、気づいていても、いなくても、照明は、我々に感情的、また物理的に影響を及ぼし、気分や感じ方を変えさせる、向精神薬的な役割をもっている。照明そのものが、シアターを作るうえでの基本的な素材をもち合わせているため、照明だけでドラマチックなものを作り上げることができる。照明が舞台の大事な一部として使われてきた、この数十年かの間に、どんどん照明が認められ、独自に発達していった。この頃から舞台照明に関わっていた私にとって、このようなプロジェクトのお話をいただいたとき、逃すには面白すぎるプロジェクトだと思ったのです。」

劇場側がこのようなプロジェクトを照明家にオファーしてきたというのですから、驚きですね。照明が、いかに認知され、可能性を秘めているかという期待が見受けられます。次の回では、2作品目のルーシー・キャーター氏の作品をご紹介します。



第1章 - 電球の小惑星



第2章 - 空から近づいてくる光の点



第3章 - プロジェクターの空間演出